

O-7-26

緩和ケアチーム、精神科、両面から診療にのぞめた一例

さいたま赤十字病院 心療科¹⁾、
さいたま赤十字病院緩和ケアチーム²⁾、さいたま赤十字病院看護部³⁾、
さいたま赤十字病院薬剤部⁴⁾、さいたま赤十字病院緩和ケア診療科⁵⁾、
さいたま赤十字病院外科⁶⁾

○浅野 聡子^{1,2)}、加藤 奏^{1,2)}、野澤やよい^{2,3)}、松島 涼香^{2,3)}、
高橋真理子^{2,3)}、長島 康恵^{2,3)}、井上 朋子^{2,4)}、町田 充¹⁾、
原 敬^{2,5)}、中村 純一^{2,5,6)}、三澤 仁¹⁾

【目的】さいたま赤十字病院緩和ケアチームは、がんやがんの治療にともなう、身体の痛み・しびれや息苦しさ、不眠・不安などの精神的なつらさを軽くし和らげることを目的として、医師(身体面、精神面)、看護師、薬剤師などからなる多職種で対応する協力体制を築いている。当院の緩和ケアチームにおける精神面担当医として、また精神科主治医として両面から診療にのぞめた、がん患者の一例があったので報告する。【方法】電子カルテをもとにさかのぼって診療録を調査した。【結果】症例はX年に進行がんと診断された70歳の女性である。主治医が本人に対し告知を行った後より、精神変調をきたし、精神科紹介され、その時から精神科主治医として診療にあたった。適応障害と診断し治療を行ったところ、気分が安定がはかれ、外来治療を継続していた。X+2年、癌性腹膜炎にて体動困難になり、当院に緊急入院した。入院中、主治医から緩和ケアチームに介入依頼があり、緩和ケアチームにおける精神面担当医として、また精神科主治医として両面から診療にのぞんだ。対象患者が、相手や場の雰囲気によって会話の内容や訴え方を変えていくことが印象的だった。最終的にはがんの進行によって自宅退院できずに施設入所する運びになったが、そこに至るまでの過程で、少しでも症例の苦しみを軽減する手助けができたのではないかと考えた。【考察】本症例を通して、緩和ケアチームと精神科の両面から診療にのぞむことで患者さんによりよい医療を提供できることを学んだ。

O-7-28

当院職員における新型コロナウイルスの抗体価調査について

清水赤十字病院 事務部総務課診療情報管理係¹⁾、清水赤十字病院 看護部²⁾、
清水赤十字病院 診療部³⁾

○中田 裕二¹⁾、経澤 知夏¹⁾、谷尻 智美²⁾、大沼まゆみ²⁾、
藤城 貴教³⁾

【目的】2021年6月から3ヵ月間隔で施行した、SARS-COV2抗体定量検査における個体差の検討
【方法】3回目接種を終えた在籍中の職員99名を対象に、計4回の抗体値を全体、性別、年齢別、
新型コロナ病床勤務の有無、BMIの経時データ、2・3回目ワクチン接種後の発熱や局所症状など
の副反応の有無を層別解析した。
【結果】全体では2回目接種群の3ヵ月vs6ヵ月、6ヵ月vs9ヵ月と有意に抗体価の低下がみられた(P<0.001)。3回目接種群は2回目接種群より有意に抗体価が増加し(P<0.001)、抗体中央値2回目
接種群9ヵ月(42IU/ml)から3回目接種群3ヵ月(9160IU/ml)では21.8倍の増加であった。性別では
2回目接種群6ヵ月で女性に有意差があり男性より低下がみられた(P<0.0459)。年齢別では2
回目接種群3ヵ月後20歳代vs40歳代(P<0.0009)、20歳代vs50歳以上(P<0.0000)、30歳代vs50歳
以上(P<0.0024)で有意差があり、20歳代が最も抗体価が高かった。2回目接種群6ヵ月、9ヵ月
は20歳代と他の群で有意差があったが、30歳代以降の群と3回目接種群には差はみられなかつた。
新型コロナ病床勤務の有無では、勤務無群で有意に経時的低下をみると、勤務有群は
3ヵ月vs9ヵ月以外に有意な抗体価の低下がみられなかった。BMIは痩せから肥満群のいずれ
にも差はなかった。接種後の副反応では、2回目接種群で発熱有(P<0.0007)の方が抗体価は高い
が、3回目接種群では差はなく、接種部位の局所症状や他の副反応群は2回目、3回目共に差は
なかった。
【考察】2回目接種群では個体差があったが、3回目接種群はどの層別でも有意差がなくなるこ
と、抗体価の上昇度合からも3回目接種から安定した予防効果が得られると考えられる。新型
コロナ病床勤務有群は抗原暴露の環境下にいることで、勤務無群と抗体価の低下において差が
あるのではないかと示唆された。

O-7-30

多発脳梗塞を契機に発見されたKlebsiella variicolaによる感染性心内膜炎の1例

熊本赤十字病院 診療部

○林田夏南子

【背景】感染性心内膜炎の起病原因としてブドウ球菌と連鎖球菌が大きな割合を占めて
おり、それ以外は、腸球菌やHACEK群などのグラム陰性菌が主である。しかし、そ
の他の起病原因による感染性心内膜炎の報告例も散見される。今回我々は、*Klebsiella*
*variicola*による多発脳梗塞および感染性心内膜炎を併発した症例を経験したため報告
する。【症例】82歳女性。JCSI100の意識障害、左共同偏視のため当院へ緊急搬送と
なった。来院時ショックバイタルであり、診察では右口角下垂と右片麻痺を認め、
指趾には爪下出血をきたしていた。心エコー検査では12.7mm大の疣贅を認め、頭
部MRI検査では左中大動脈水平部閉塞による左中大動脈領域の広範な脳梗塞と塞
栓症による多数の微小脳梗塞を両側脳実質に認めた。全身状態が不良であったため
感染性心内膜炎は手術適応とはならず、脳梗塞に対しても保存的治療の方針となつた。
セフトリアキソンとバンコマイシンによる治療を開始し、第3病日に血液培養から
*K. variicola*が検出されたためセフトリアキソンとバンコマイシンに変更したが、全身
状態は徐々に悪化し、第7病日に死亡退院となった。【考察】*K. variicola*は土壌や植物
に定着する環境細菌であり、近年ヒトへの感染症を引き起こすことが知られている。
*Klebsiella pneumoniae*による感染症よりも死亡率が高いという報告の一方で、検出
方法が確立していないためその同定が困難であるとされている。【結語】*K. variicola*
が感染性心内膜炎の起病原因となりうることを示唆された。

O-7-27

緩和ケアにおけるはり師の活動

熊本赤十字病院 総合内科¹⁾、同 看護部²⁾、同 血液腫瘍内科³⁾、
同 リハビリテーション科⁴⁾、同 栄養課⁵⁾、同 薬剤部⁶⁾、同 循環器内科⁷⁾、
同 精神腫瘍科⁸⁾

○三谷 直哉¹⁾、モーエン智子²⁾、長小田かおり²⁾、堤 満理奈²⁾、
永田 裕子³⁾、村上 瑠梨³⁾、作村 里美⁴⁾、石橋 輝彦⁴⁾、
井出 浩子⁵⁾、岩田 一史⁶⁾、伊藤 彰彦⁷⁾、武井 宣之⁸⁾、
栗田 志麻³⁾、加島 雅之¹⁾

【緒言】「はり師」「きゅう師」の2つの資格は赤十字病院の職分として登録されている。
熊本赤十字病院では2019年8月に「はり師」を採用し、入院患者と一部職員に対して鍼
治療を行っている。現在、緩和ケアチームにも参加しており、疼痛や食欲不振、
低活動性せん妄など様々な症状に対応している。この度、緩和ケアでの鍼灸の活動
を報告する。【方法】鍼治療の介入にあたり医師が書面で同意を取得し診療する。
診療後、鍼治療の処方を出し、処方をもとにはり師が施術を行なう。緩和回診で鍼
治療の適応として挙げられた患者も同様の方法で介入している。血液腫瘍内科の
行なった患者のNRSや食事摂取量の変化を電子カルテから抽出し効果を判定した。
【結果】2019年8月～2022年3月31日時点で累計鍼治療総数は372名であった。そのうち、
血液腫瘍内科の患者は85名(23%)であり、有効例60名・無効例22名・効果判定困難例
3名であった。鍼治療の依頼は疼痛緩和が63例(有効率84%)と一番多く、倦怠感24例
(有効率67%)、食欲不振22例(有効率59%)と続き、様々な症状に対して依頼があった。
【考察】鍼治療は身体的疼痛の緩和だけではなく、精神的苦痛や食欲不振、倦怠感
など疼痛以外の症状にも有効であった。疼痛に対する鍼治療の依頼が多いのは、「鍼
灸=痛み以外く」というイメージの偏りが反映されていると考えられる。今後鍼灸に
対する正しい認識を啓蒙していきたい。

O-7-29

尿中抗原陰性であったが腐葉土との接触から診断に至ったレジオネラ肺炎の一例

沖縄赤十字病院 内科

○有馬聖志朗、我謝 正平、當銘 玲央、那覇 唯、内原 照仁、
赤嶺 盛和

【緒言】
レジオネラ症はその簡便性から尿中抗原検査で診断されることが多い。今回、尿中抗原検査が陰性
であったレジオネラ肺炎を経験したため報告する。
【症例】
69歳男性。来院5日前に38.5度の発熱あり。解熱薬で対応していたが、発熱持続と倦怠感、食思不
振、腰痛が出現し来院日に前医を受診した。前医の胸部CTで右肺上葉にコンソリデーションを認
め、入院治療目的に当院紹介となった。来院後の問診で園芸が趣味であり、来院11日前に大量の腐
葉土を扱ったことが判明し、レジオネラ肺炎を疑って尿中抗原検査を行った。結果は陰性であり
ABPC/SBT開始となった。入院後も発熱が持続するため気管支鏡検査施行し、オレンジ色の肺
洗浄液を採取、レジオネラ遺伝子検査へ提出した。同日、LVFX開始した。その後全身状態、肺炎
像ともに改善し、入院11日目にLAMP法でレジオネラ陽性、計14日間LVFX投与後、退院となった。
【考察】
レジオネラ属菌は元来土壌細菌で、人口環境にも広く分布するグラム陰性桿菌である。レジオネラ
肺炎の起病菌の多くは*Legionella pneumophila*が占めており、尿中抗原検査で検出可能である。腐
葉土から分離されるものには*Legionella longbeachae*が代表的であり、尿中抗原検査で検出できな
い。また、発症直後では抗原が検出感度以上に達しないため陰性を示す場合がある。本症例では
尿中抗原検査が陰性であったものの、腐葉土の使用歴からレジオネラ肺炎を疑って精査したため
診断に結び付いた。
【結語】
尿中抗原検査は簡易的であり有用であるが、偽陰性を示す場合があることを念頭に置き、腐葉土の
使用歴がある場合にはレジオネラ症を考慮する必要がある。

O-7-31

Streptococcus dysgalactiae subsp. equisimilis (SDSE) による左下腿壊死性筋膜炎の一例

沖縄赤十字病院 内科

○下地 拓朗、赤嶺 盛和、内原 照仁、那覇 唯、當銘 玲央、
我謝 正平、上原絵里子、金城 聡

【症例】93歳女性。来院前日、椅子から立つ際にバランスを崩して転倒し左肩痛が出現
したため当院救急外来を受診した。来院時39.4℃の発熱あり、左下腿に発赤と熱感
を認めた。血液検査で白血球正常値だがCRP 17であった。エックス線画像で左上腕
骨近位部骨折を認め、単純CTで左下腿皮下に脂肪織混濁、腫脹を認めた。皮膚軟部
組織感染を疑い入院の上で抗生剤投与を開始した。入院後、左下腿に紫斑、水泡が
出現し拡大傾向を認めたため、入院3日目に水泡部を試験切開したところ、finger test
陰性であったが脂肪織内の塗抹標本からSDSEが検出された。入院4日目、CO2カテー
タによる意識障害が出現しLNPVを開始した。入院5日目、紫斑の増強、水泡形成
のさらなる拡大がみられ左下腿を再度切開したところ、finger test陽性の所見が得ら
れる壊死性筋膜炎の診断となった。その後皮膚壊死が出現し適宜デブリドマン施行する
も壊死は進行した。入院14日目、CO2貯留の改善が見られず人工呼吸器管理とした。
入院27日目、下肢エコー検査で左足背動脈の血流低下が認められ、入院28日目、下
肢動脈造影検査施行したところ両側膝窩動脈から足背動脈、後脛骨動脈にかけて重
度の閉塞が見られた。入院31日目、末梢血管カテーテル治療を行うも皮膚壊死の進行があ
ったため、入院43日目、救命目的に左下腿切開を施行した。術後経過は良好で呼吸状態
も改善を認めている。【考察】壊死性筋膜炎の診断においては早期に皮膚切開を行い、
筋膜所見を観察することが重要である。診断後は早急かつ十分な外科的デブリドマン
を行う必要がある。SDSEはA群溶連菌と比較し高齢者への感染が多いと報告されて
いる。劇症例も増加しており皮膚軟部組織感染症の起病原因として想起する必要がある。